

埴穴塚発掘調査報告書

—団体営土地改良総合整備事業にかかる調査—



1989年5月1日

大野原町教育委員会



埴穴堀全景

(雲辺寺山頂より
撮影方向 東方から)

埴穴塚発掘調査によせて

わが郷土が何時の時代に拓けどのように文化が創られてきたか関心を持つことは、現代に住む人々の愛郷心のあらわれであると思います。

郷土大野原には、弥生時代にすでに先人が文化を創っていたことを立証する遺跡が発見されており、降って古墳時代には、赤岡山古墳群をはじめ平塚、角塚、楕円墳の巨大古墳群並びに豆塚古墳群、緑塚古墳群等一大古墳地帯を形成しており、郷土の古墳文化の一大隆盛期を思わせるものがあります。

このたび、花輪地区の団体営土地改良整備事業の推進にあたり、県内でも珍しいと言わる古墳時代終末期の方墳の発掘を見たことは、本町の古墳の歴史に新しい一ページを加えることになり、大変意義深いことであり歓びにたえません。花輪の海浜地帯に私どもの先祖が住み荒野を開拓しながら古代文化を創り出していたことを想うとき、限りなき豪華と敬慕の念にかられます。私どもは今回発掘した遺物を大切に保存して後世に伝えるとともに、先人の創った文化に学び、町発展の活力にしたいと考えます。最後に本発掘調査にあたり、ご指導いただいた県教育委員会並びに地権者の方々に心から感謝申しあげてござります。

平成元年5月1日

大野原町長 菊田 良知

序

文化財は郷土の先人の残した貴重な文化遺産であります。これらの文化財を大切に保護し、学び、そして正しく後世に伝えることは、現代に生きるわたくしたちの責務であります。

このたび、花畠北地区で、町営による団体営土地改良総合整備事業小規模排水事業が行われる計画がすすめられました。

花畠地区は古くから文化の開けたところで、古墳や寺院跡など多くの遺跡が見られます。当地区の東北端に位置する埴穴塚からは、かつて多数の遺物が発掘されたとの伝承があります。

町教育委員会では県教育委員会文化行政課のご指導を得て埴穴塚発掘調査の計画を樹て昭和62年8月から約5ヶ月間調査をすすめました。調査にあたっては、香川県教育委員会、土地所有者その他多数の関係者のご指導とご協力をいただきましたことに対し厚くお礼申し上げます。

平成元年5月1日

大野原町教育委員会教育長 藤川美男

例　　言

1. 本書は団体営土地改良総合整備事業小規模排水事業に伴って、昭和62年8月より昭和63年1月まで5ヶ月間に亘って実施した埴穴塚古墳遺跡の発掘調査の概要報告である。
2. 上記古墳遺跡の所在地は、香川県三豊郡大野原町大字花畠字東野田1277番地の4及び1277番地の5である。
3. 発掘調査は香川県教育委員会文化行政課指導の下に大野原町教育委員会が実施した。
4. 調査体制は下記のとおりである。

総　括	大野原町教育委員会教育長	藤　川　美　男
	大野原町教育委員会教育課長	藤　田　茂
調査担当	元香川県文化財専門委員	高　橋　邦　彦
	大野原町文化財保護協会会員	真　鍋　和　三
庶　務	大野原町教育委員会主幹	守　谷　信　雄

5. 報告書執筆者
- 高　橋　邦　彦
- 図版・写真作成
- 真　鍋　和　三

6. 調査の実施や整理報告に際し、下記の方々から多大のご協力、ご教示を受けました。
厚く謝意を表します。

高　城　秋　一　・　多　田　光　恵

7. 出土した遺物については、大野原教育委員会が保管する。

目 次

第1章 環 境	8
(1) 地理的環境	8
(2) 歴史的環境	8
(3) 墳穴塚との出会い	10
第2章 発 挖 調 査	10
(1) 現況と予備調査	10
(2) 封 土	14
(3) 玄 室	14
(4) 周 溝	16
(5) 遺物出土状況	18
第3章 結 び	41

第 1 章 環 境

(1) 地理的環境

大野原町の南境は、徳島県池田町との県境にそびえる標高 920 m の雲辺寺山系が、西南にのび曼陀羅からはほぼ西方に走って金見山(596m), 大谷山(507m)に及んでいる。こうした広大な山地の雨水は、町のはば中央に築造されている井関池に注ぎ、柞田川を北に流れて丸井北あたりから観音寺市に入り燧灘に流入している。大野原町の西部は海に面した豊浜町が愛媛県と境を接している。したがって大野原町の西方燧灘の海岸線は僅かで 1600 m ばかりである。この海浜に展開する 4 集落を古来花畠と呼称している。埴穴塚は花畠地区の北の集落に属し、三豊郡大野原町大字花畠字東野田1277番地の4 及び1277番地の5に跨って占地している。

大野原町は前記のとおり、柞田川の上流域は山地で、山麓から燧灘に面する花畠に及ぶ地域は緩やかに下降する大沖積平野として開拓されている。この穀倉地帯大野原は北方と南方に僅かずつ下降した扇状地形台地をなして、吉米農業用水に不自由をしてきた耕地である。大野原の広い原野は寛永年間に平田与一左衛門を中心にして開拓されているが、花畠地区の開発は、佐野又兵衛、河崎惣右衛門等によって開発工事がすすめられ、又平新開、花畠下浜新田、大次江村際新田が主に承応年間(1652~1654)に開拓されている。

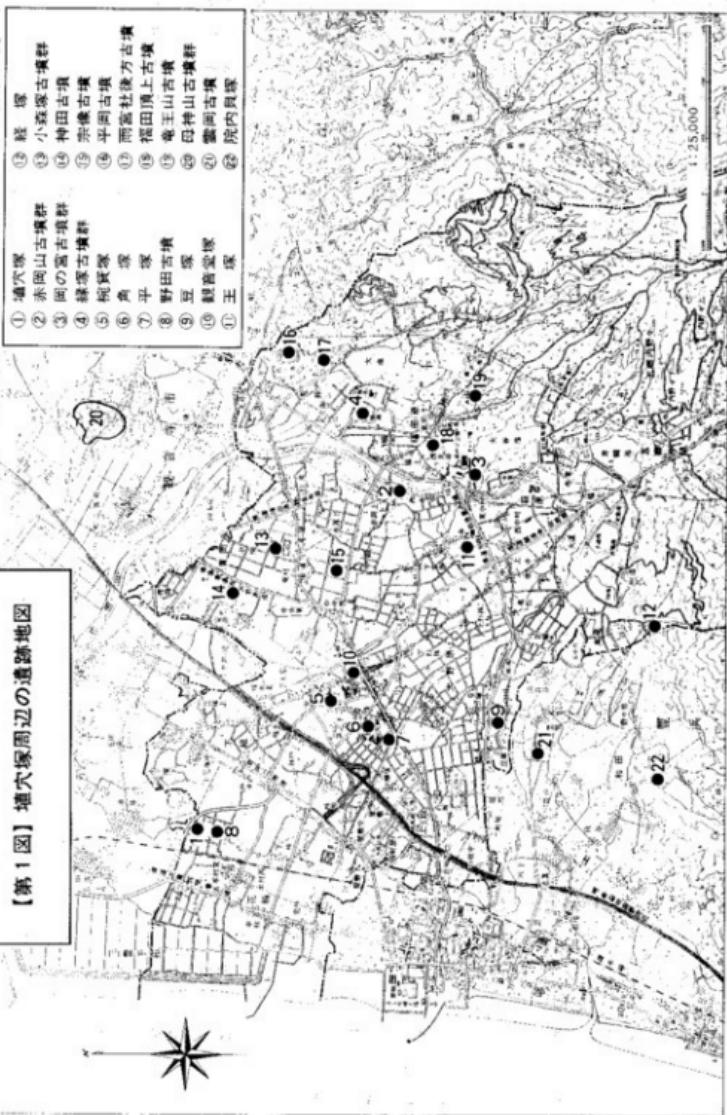
さて埴穴塚を中心に周辺の状況を眺めると、東南方向の雲辺寺山麓までは約 4000 m、西方の海岸までは 950 m で、埴穴塚築造当時の海浜は、標高地名などから塚の西方約 600 m 附近を南北に走っている県道丸亀豊浜線あたりと想定される。埴穴塚の標高は約 11 m であるが、北方へ約 200 m の地点に観音寺市柞田町に属する野都合の祠が、縁したたる楠の巨木の社叢の中にある。更に北方に広庄池、五兵衛池が築造されている。塚から南方 200 m の友広地区にも野都合祠の大楠と対称的に楠をふせたようなスタイルの大楠があり樹下に荒神の祠が祀ってある。埴穴塚はこのように燧灘の海辺に近い風光明美な田園地帯の中に築造されている。

(2) 歴史的環境

三豊郡内では旧石器時代の遺跡は未だ一ヶ所も発見されていないが、縄文式文化の遺跡は仁尾町、蛇間町で数ヶ所発見されており、弥生式文化遺跡は各所で調査報告されている。降って古墳文化時代の遺跡は更に数を増して、2~3 の地域を除く全城から調査の報告が行われている。三豊郡内には、北部に高瀬川、中部に財田川、南部に柞田川があつて山野の雨水を瀬戸内海に注いでいる。川は文化の通路として古来人々の生活に密接な関連をもって地域文化の向上に寄与してきた。郡内各地に分布する古墳を踏査すると殆んどが高瀬川、財田川、柞田川の流域に結集している。

雲辺寺山麓の雨水を集めて豐稔池、井関池を経て曲折しつつ燧灘に注ぐ柞田川の中流域には特に古墳が群集している。埴穴塚の東南方 3500 m に位置する赤岡山古墳群は、柞田川の左岸に接するナマコ状の丘の上に 30 余基が分布していたが、その内の 1 基を赤岡山三号古墳と呼んで香川県の指定文化財として登載されている。この赤岡山古墳の東南方 500 m 柞田川の右岸の丘に岡の宮古墳群が

【第1図】埴穴塚周辺の遺跡地図



ある。又赤岡山古墳群の東方800mの丘の上に先年発掘調査が行われた緑塚古墳群がある。更に埴穴塚の東北東4000m柞田川の右岸に、金山古墳群で世に知られている母神山古墳群がある。埴穴塚の東南1600m大野原町の中央地域に巨大な横穴式石室で著名な楕円形、角塚、平塚が500m程の間に一直線に並んでいる。何れも香川県の文化財として指定されている。埴穴塚の南方300mの地点で野田古墳が昭和23年開田整地中に発見され、須恵器等多数出土したが、そのうち壺、壺蓋短頭の小壺三個は保有されている。野田古墳の近くにカワラケ塚が占地していたが昭和10年頃に拓いたと伝えられている。尚、大野原町内で姿を消滅した古墳として、豆塚、觀音堂塚、王塚、経塚、小森塚、神田古墳、緑塚古墳群、平岡古墳群等がある。

(3) 墓穴塚との出会い

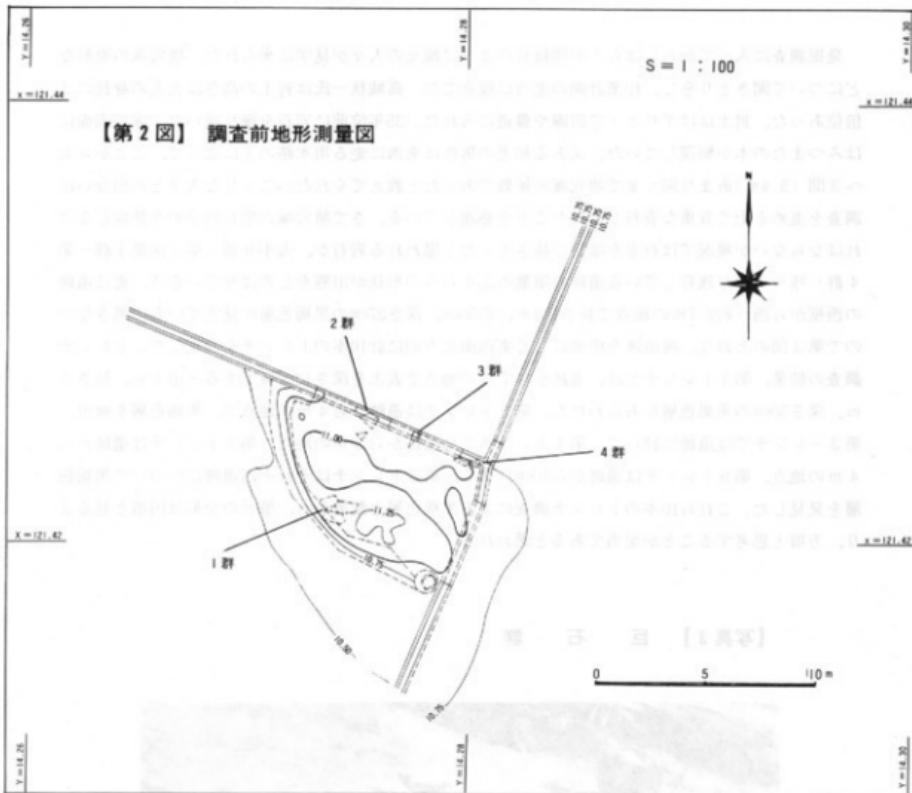
昭和25年9月ごろ、多田利久氏が花畠地区に埴穴塚という古墳があると話されたことがあった。一度行って見ようと思い、数日後、十三塚から野都合さんの大楠を目指して畦道を伝って野都合神社に立ちどまり、教えられた通り南方100m程の所に夏草が繁茂する険しい地所を見た。古墳だと云うのに封土も見られず、地形が円形でもなく、方形とも見られない。背丈の伸びた雑草の中に、石材が数個無造作に岩肌を寄合っている。これだなあと思いつばらく眺めて帰途についた記憶がある。石川利春氏の近著「花畠歴史探訪」によると埴穴塚は、昭和2年発掘されたことがあると述べている。

第2章 発掘調査

(1) 現況と予備調査

埴穴塚古墳の調査対象地は花畠字東野田の水田で、古老の話によると農業用水に不自由な地域なので用水井戸を掘って用水を汲み上げて耕作していたが、少しの水でも粗末に出来ないので、南北に三面コンクリートによる用水路を設け、埴穴塚の敷地も分割して耕作することになり、協議の上で南北に走る用水路にT字形に東西に走る用水路を設けた。従って、荒廃の姿で封土を殆んど失っている埴穴古墳は敷地の約3割程をT字形水路の西南隅に残していたと云えるであろう。現在残っている埴穴塚古墳の所在地は花畠字東野田1277番地の4で、東西方向水路の北側に接する耕地花畠字東野田1277番地の5には埴穴塚古墳の約7割が属していたであろうと推定される。花畠字東野田1277番地の4の雑草が繁茂していた叢の掃除作業を終えた古墳を見渡すと(第2図)、すでに述べたとおり、亡者が永遠に安住する所としての平穏でならかな面や環境が破壊、喪失されてしまっている。封土も取り去られ、玄室を固めるために遠方から運んできた岩石も抜き取られて第1群、第2群、第3群、第4群(第2図)と無造作に置かれており、塚の東南隅には農業用水の丸井戸を掘って、その排水をほぼ中央の南よりに盛り上げてある。

古墳の南西面は、張らみのある傾斜線が僅かに残されていて、標高は井戸掘りによる土盛の箇所で、11.25mで東方と北西に進むに従って多少の凹凸は見られるが全般的には僅かながら低下している。



【写真1】 墳穴塚古墳調査前



(撮影方向 南方から)

【写真2】 墳穴塚古墳調査前（伐開後）

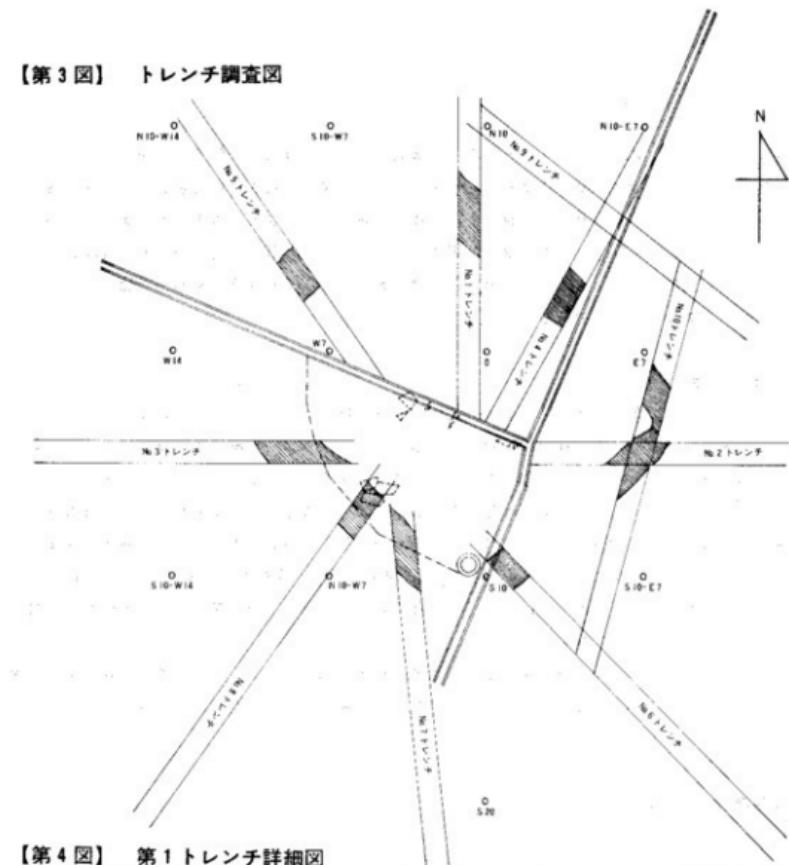


発掘調査に入ってからしばらくの間毎日のように地元の人々が見学に来られた。埴穴塚の原形などについて聞きとりをし、作業計画の進行に役立てた。高城秋一氏は封土の高さは大人の身長の2倍位あった。封土はけずりとて田園や農道に入れた。35年位前に岩石を掘り抜いた。塚の表面にはみつまたの木が繁茂していた。又ある初老の男性は東西に走る用水路の上に立って、ここから北へ3間(5.4m)あまり向うまで埴穴塚の屋敷であったと教えてくれた。こうした人々との出合いは調査を進める上で貴重な資料となったことを感謝している。さて埴穴塚の墳丘の全形を把握しなければならないか現況では石室を壊して抜きとったと思われる岩石が、大小9個（第2図第1群～第4群）残っており残存している遺跡の墳麓のふくらみの形状が旧態をしのばせている点、更に遺跡の西端から西へ約2.7mの地点で長さ1.4m、巾50cm、深さ27cmの黒褐色層が見えているに過ぎないので第3図のとおり、現遺跡を中央にして東西南北方向に計10本のトレンチを設定した。トレンチ調査の結果、第1トレンチでは、遺跡から7mの地点で表土を深さ12cm排土すると巾1m、長さ3m、深さ50cmの黒褐色層があらわれた。第2トレンチは遺跡から4mの地点で、黒褐色層を検出、第3トレンチでは遺跡に統いて、第4トレンチでは遺跡から5mの地点、第5トレンチは遺跡から4mの地点、第6トレンチは遺跡から50cm、第7、第8トレンチはそれぞれ遺跡につづいて黒褐色層を発見した。これら10本のトレンチ調査による黒褐色層と配置から、墳丘の全形は円墳と見るより、方墳と思考することが至当であると思われる。

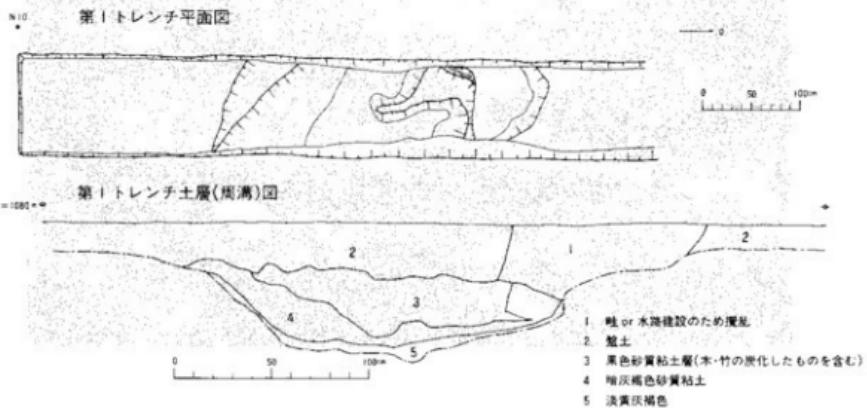
【写真3】 巨 石 群



【第3図】 トレンチ調査図



【第4図】 第1トレンチ詳細図



(2) 封 土

埴穴塚の封土は、前記のとおり、東野田1277番地の4にはば直角三角形の形で残っているので、この部分の表土を約40cm、雑草夾雜物と共に除去すると、栗石を敷きつめた層があり、栗石層の下は深さ8cmほど淡黄色の土を鉢状に練り上げた練土を敷き延べて固めてある。第2層は、6cmほどで黒褐色の混合層でやや固い。第3層は茶褐色を呈する土でその厚さは約10cm。第4層は黄色がかかった茶褐色で比較的柔かい土である。要するに埴穴塚の周辺にある暖色で平和で平穏を匂わせている土を選んで築造したことが推定される。

(3) 玄 室

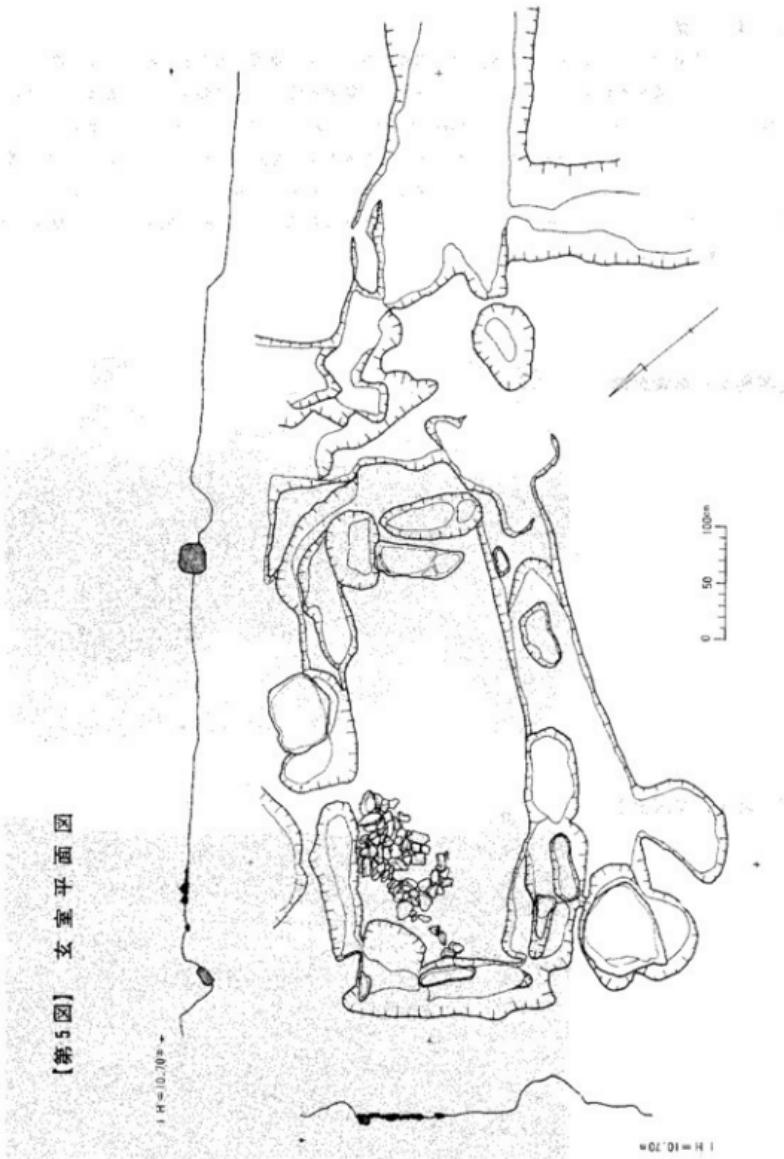
玄室は遺存状況が極めて悪く、玄室の基底石であると思われる石材が、北部側壁のおおよそ中央で1個、西北隅で1個、東部側壁で1個を夫々検出したのみで、他は總て抜き取られているが側壁の基本部を固定するために使用したと思われる淡黄色の練り土による凹みが明らかに残っているので、それから玄室のおおよそその輪郭が想定される(第5図)。玄室は大きな矩形で長辺(東西方向)は側壁の外側が4.2m乃至4.4m、内面は3.5m乃至3.8mあり、短辺(南北方向)は側壁の外側が2m乃至2.2m、内面は1.3m乃至1.4mである。奈良県明日香村の高松塚古墳や、キトラ古墳などは、南北約4m、東西約2mと報告されているのほぼ同じ寸法で終末期古墳(7乃至8世紀)の標準型と見て差支えないと思われる。

次に玄室内床面の構造は、中央部を除いて2重に石敷を施している。下層は栗石を敷き並べ上層は砂利層で覆っている。礫層の上部は全面に淡黄白色の練り土で塗り被われている。

【写真4】 玄 室



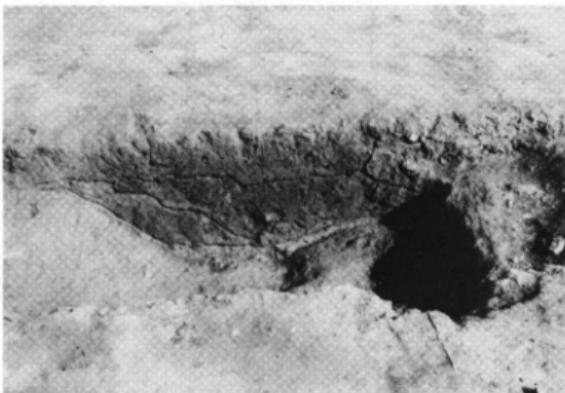
〔第5図〕玄室平面図



(4) 周溝

トレンチ調査のさいに検出した、8ヶ所の黒褐色層を基本に周溝の調査を進めたところ第6図のとおり方形の周溝を確認することができた。周溝の外側実測値は、北東部16.5m、南東部14.95m、北西部13.75m、南西部15.6mであって周溝は第4図のとおり天巾2.05m乃至2.5m、底面巾1.05m乃至1.4m、深さ45m乃至50cmである。埴穴塚の外形を大化の薄葬令に照合して見ると、「方9尋、高5尋」とあり、1尋は1.75mであるから、換算すると、方15.75m、高さは8.75mとなるので、埴穴塚の場合はほぼこれと一致しているといえる。高さは開墾されて正確な数字によって照合できないのは残念である。

【写真5】周溝断面

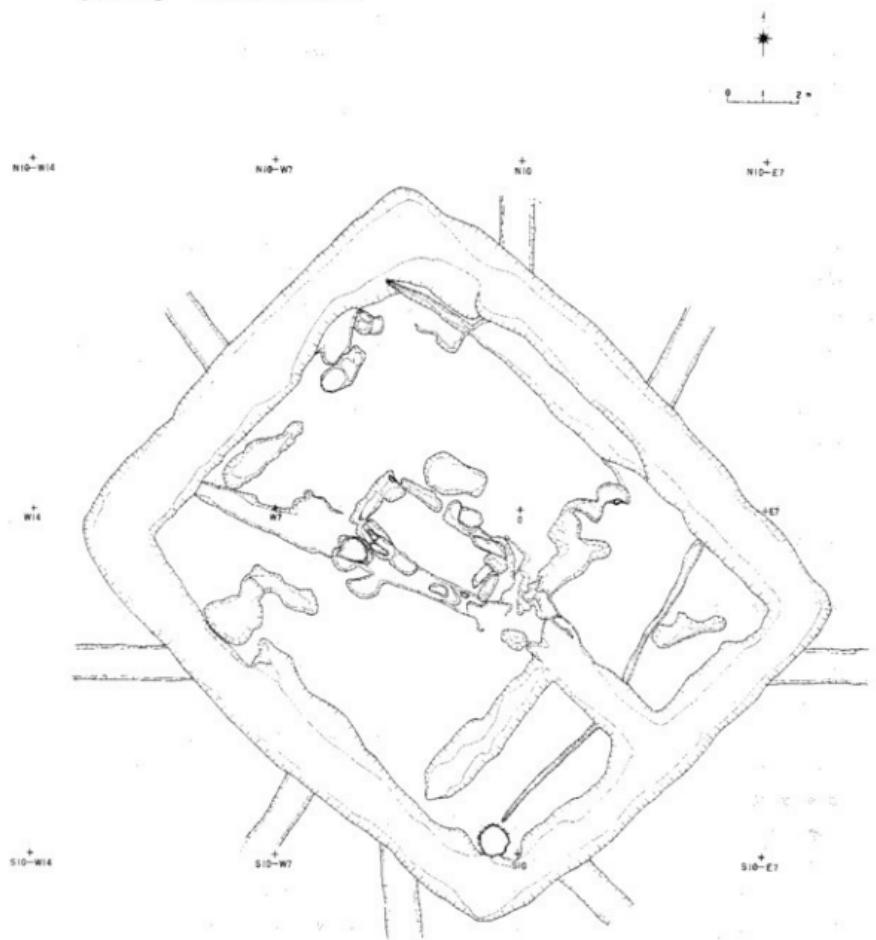


【写真6】周溝全景



(撮影方向 東方から)

【第6図】 調査後地形測量図



(5) 遺物出土状況

埴穴塚は先述のとおり、乱掘、擾乱されていた。したがって石室内からは耳環（金）2個が検出されたに過ぎず、須恵器類は總て周溝内とみてもよく一部はその外側から検出された。特に周溝の南隅とその外側に集積していた。土師器片は約37片検出したが極細片で摩耗が甚だしく復元是不可能である。須恵器の破片は復原された26個分を除いて2000個以上の多数を採集した。器種別にみると壺類が目立って多かった。器壁は薄いもので0.7~0.8cm、厚いものは1.2~1.8cmと厚手で大型、中型の壺の破片が多かった。当地域は地理的に水に恵まれないので、土器の入手、製作にあたって大型、中型の貯蔵用土器が優先的に要求されたものと推考される。

須恵器の生産は、陶部という専門の工人集団が（土師部の中に加わらず）、自らがもたらした新技術によって、大型の容器を作り出し工芸面での新技術と共に日常の汁器としての須恵器が、往時の豪族間に流行し更にこれが墳墓に持ち込まれるように移行したものと思われる。須恵器の製作には良質の原土を採掘し（水瓶を行わなかつただろう）、適当に精選し（水分を蒸発させ）土器作りには最初からロクロを使い、大型のものは底になる円形部の粘土の縁に紐粘土を巻き上げて、内外からたたいて胴体を造り、別に、ロクロで作った口辺部を胴の上に接合したようである。この方法によって製作されたものには胴部の内外両面に、一種の文様が現われている。外面の文様は荒い斜の又は格子の打圧文、内面には同心円文が不規則に重なっていたり時には青海波文を示していることもある。こうした内外からの打圧作業は器壁をしめて丈夫にするため土器の内外から同時にたたいて生じた文様で、初期は木の道具の自然の木目であったと思われるが、後には美意識による文様表現に発展したものと考えられる。

●耳 環（金）2個 （写真7—第7図）

石室の北西部にわずかに残存していた砾床の栗石層から検出された。大きい方は外径2.8cm、内径1.5cm、両端の間隙は0.3cmで重さは16.8gである。小さいのは外径2.4cm、内径1.3cm、両端の間隙は0.2cm、重さは5.1gで、いずれも、C字形をしている。また、小さいほうの金環は一部分が損傷して金箔が剥離している。その状態からこの金環は青銅の環に金箔をかむせ包むという製作工程で製作されたと推考される。

●須 惠 器

壺<1> （写真8—第8図）

器高43.3cm、深さ42.2cm、口径23.1cm、口頭部の高さ5cmという大型土器である。胴部の内面は同心円の満巻文（第20図1）の押型で外面は小さい格子形の押型で器壁を縮め（第20図2）、堅固に形成し、外面の一部にクシナデ整形が施されている。口頭部は短く外反し口縁端部は丸味のある整形になっている。

壺<2> （写真9—第9図）

器高41cm、深さ39.9cm、口径21.6cm、口頭部の高さ7.2cmで壺<1>と同様に大型である。胴部の内面には同心円満巻文（第21図）が、外面には壺<1>よりも目の細かい格子型（第22図）の押型文（縦線が横線よりやや弱い）が施されている。口頭部は短くて外反し、口縁部には丸味がある。

横蓋（よこべ）

（写真10—第10図）

器高32.5cm、口径13.6cm、口頸部の高さ5cm、胴部の長径41cm、短径31.2cm、器形は俵形の上部の中央どころに口頸部を付した変わった形態の壺で〈1〉と〈2〉とともに大型である。

平瓶〈1〉

（写真11—第11図）

器高19.5cm、口径11.2cm、胴部の径23.3cm、口頸部の高さ8.5cm。口頸部はやや外反し、上端より3cmのところに幅0.3cmの凹線が一条ある。器体の天井部に膨らみがなく、上面に形式的な退化した把手を付している。把手の基部の左右に直径0.5cmの輪を3つ配した押型文がある。胴部には幅0.3cm程の凹線二条に挟まれた幅1.7cm程の波状文（第23図）からなる文様帶が施されている。また、肩部から底部にかけて櫛状用具を使ってロクロによる撫上げ調整がみられる。

平瓶〈2〉

（写真12—第12図）

完成に近い状態で周溝の南隅から出土した。器高10.6cm、胴部の径12.6cm、口頸部の高さ4.3cmと小型である。口頸部は外反し、胴部の天井部はやや丸味をもち、肩部の棱線は明瞭である。胴部の外面は回転なで調整が施されているが底部には回転へら削り調整がみられる。

平瓶〈3〉

（写真13—第13図）

器高9.4cm、胴部の径10.2cm、口頸部の高さ3.3cmと平瓶〈2〉よりさらに小型である。口頸部はやや外反し、外面に一条の凹線が見られる。胴部の外面は回転撫撫調整が施され、底部外面にへら削りが施されている。天井部にはやや膨らみがみられ、肩部に稜がある。

高坏〈1〉

（写真14—第14図）

無蓋短脚高坏で坏部には凹線が二条、その間に櫛状用具を用いた刺突文の文様帶がある。脚の基部は細く直下に延び、下部は緩やかに外反しラッパ状に開いている。脚部の下方に一条の凹線がある。器高7.5cm、坏部の径は9cmと小型である。

高坏〈2〉

（写真15—第14図）

無蓋短脚高坏で坏部の外面下部に一条の凹線を施している。脚の基部はやや太くてラッパ状に外反し、その下端部はさらに低く反り上っている。器高7cm、坏部の径は9.9cmである。

高坏〈3〉

（写真16—第14図）

有蓋短脚高坏で、坏部の口縁部に返りを施している。脚部の高さは低く、基部は太い。そして下方はラッパ状に開いている。器高8.4cm、坏部の径は14.1cmと小型である。

坏蓋〈1～7〉

（写真17—第15図）

蓋身の口徒10cm前後と小型である。蓋の内面に比較的長い返りがあり、口縁端部より下方に延びている。返りは折込み手法によって作られたと思われる。外面の中央には断面が菱形を呈する宝珠様のつまみが付されている。また、外面中央2/3程度は回転へら削り調整が施されている。〈1〉・〈2〉・〈3〉・〈5〉の外面には細い凹線一条がみられる。

坏身〈1～7〉

（写真18—第16図）

坏身は蓋に比して手法的には雑な感じがする。形態は底部が平らで口縁部が直立気味に立上がっている。底部外面は回転へら削り調整によって整形されている。〈2〉・〈3〉・〈4〉・〈6〉・〈7〉の外面下部にそれぞれ一条の凹線がある。

鉢

(写真19—第17図)

径29.4cmの浅い皿状に近い形態を呈するもので、口縁部の内側に返りがあるので蓋を伴ったものと思われる。また、返りは折込み手法によるものと思われる。内面は回転指撫で法による調整のうえハケで仕上げ調整されている。外面の口縁端部に二条の凹線がある。

提瓶

(写真20—第18図)

器高26.3cm、球体上部に口頭部を付した水筒のよう、胴部の上面の左右に紐を通して提げるかのような機能性に富む把手を付している。胴部の外両の一面にはロクロによる細かい同心円文(第22図)が施され、その内面は回転指撫で後指撫で調整され、他の外面には櫛搔き目調整を施し、内面は渦巻き押圧文を施している。口径は13.4cmあり、口頭部は直立し口縁部より1/3程下ったところに一条の凹線がある。なお、口縁部は注水に便利なような形に変形されている。

台付長頸壺

(写真21—第19図)

口頭部は欠損して復元不可能。胴部の径は18cmある。肩に張りがあり、外面の上部に刺突による文様帶がある。下部は回転ヘラけずり調整が施されている。台部は短く下部に一条の凹線があり、その上部には長方形の透かしが2箇所施されている。

【写真7】耳環

《文》造

【写真8】



【写真8】壺<1>

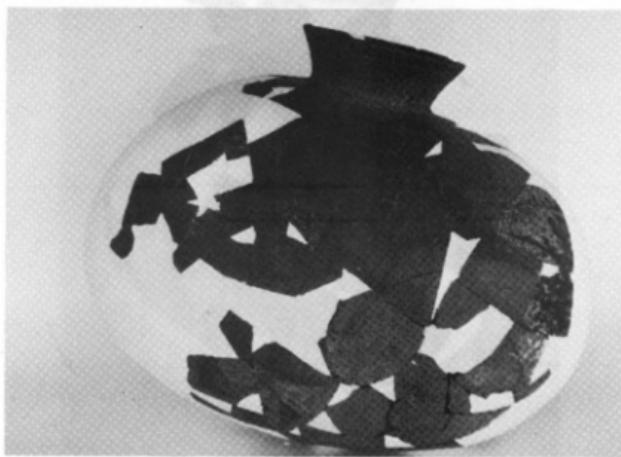
【写真8】



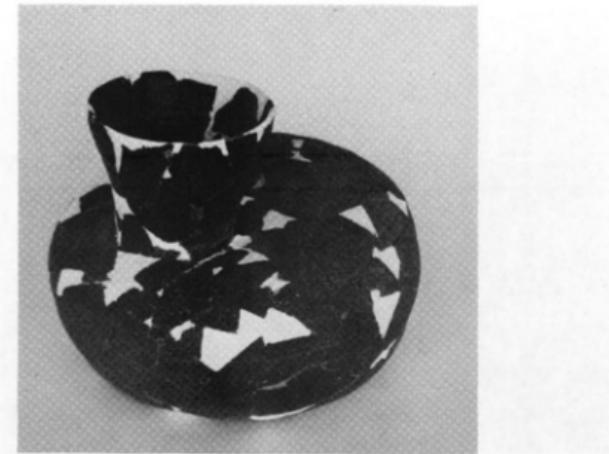
【写真9】 壺 <2> 横 瓶 [写真零]



【写真10】 橫 瓶 (よこべ)



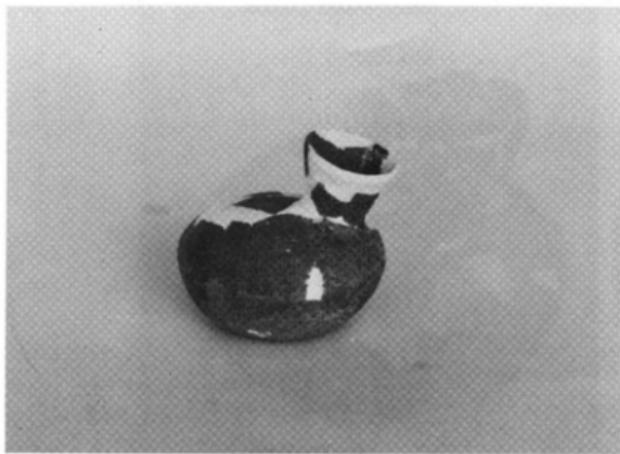
【写真11】 平 瓶 <1> （下） 高 平 【写真12】



【写真12】 平 瓶 <2> （上） 平 高 【写真13】



【写真13】 平 瓶 <3> 〔口裏器〕

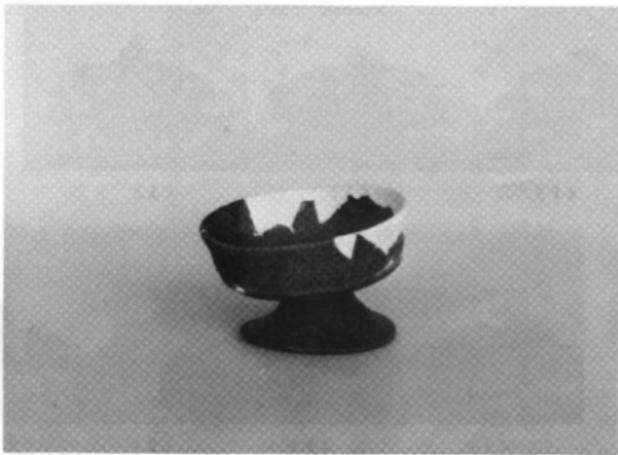


【写真14】 高 坯 <1> 〔口裏器〕



高 烟 坯 [写真15]

【写真15】 高 烟 坯 <2>



高 烟 坯 [写真16]

【写真16】 高 烟 坯 <3>

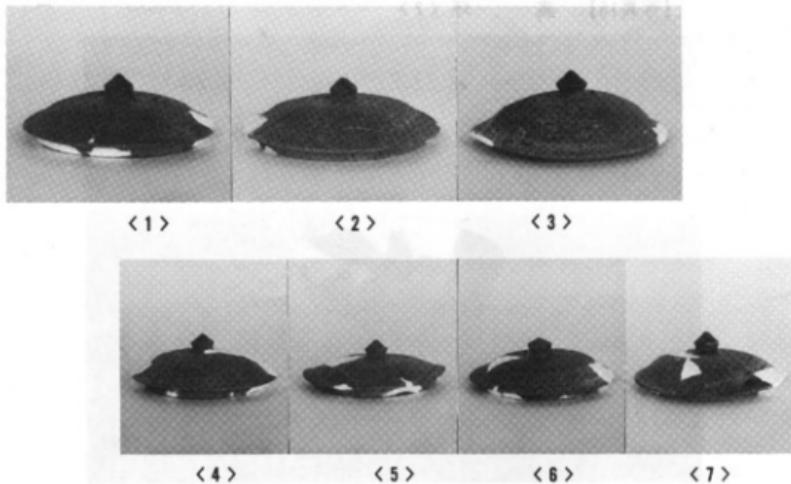


〈25〉

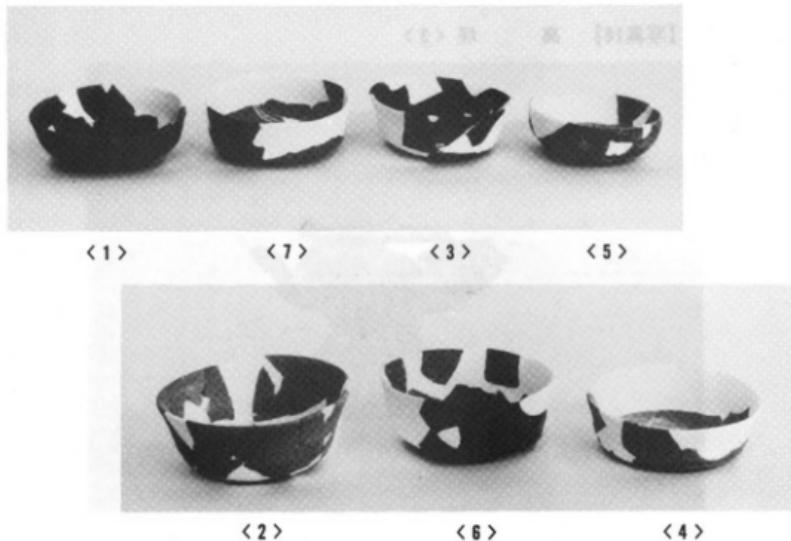
〈26〉

〈27〉

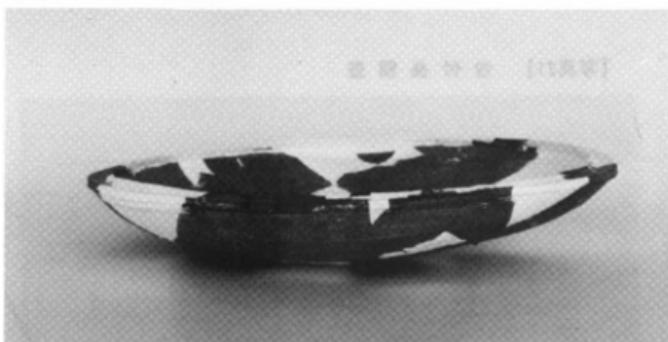
【写真17】 杯　　蓋



【写真18】 壊　　身



【写真19】 鉢



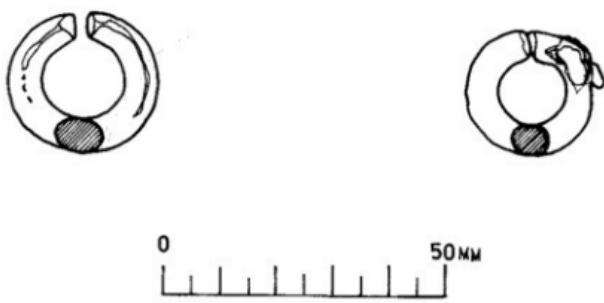
【写真20】 提 瓶



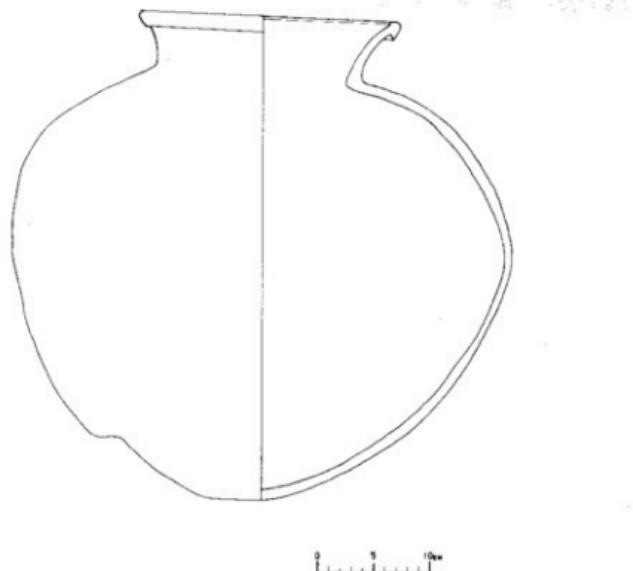
【写真21】 台付長頸壺



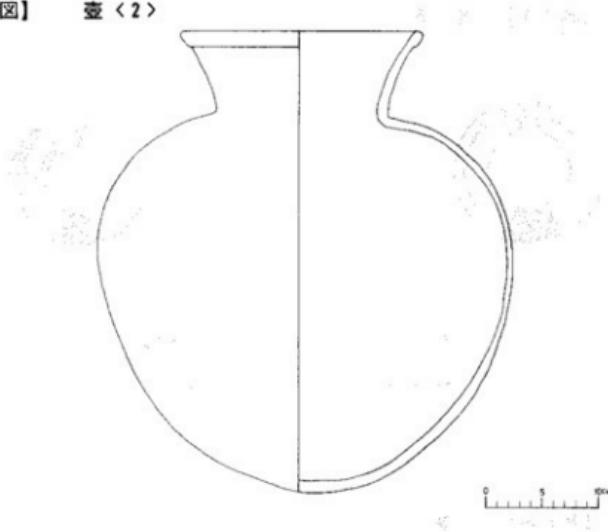
【第7図】 耳環



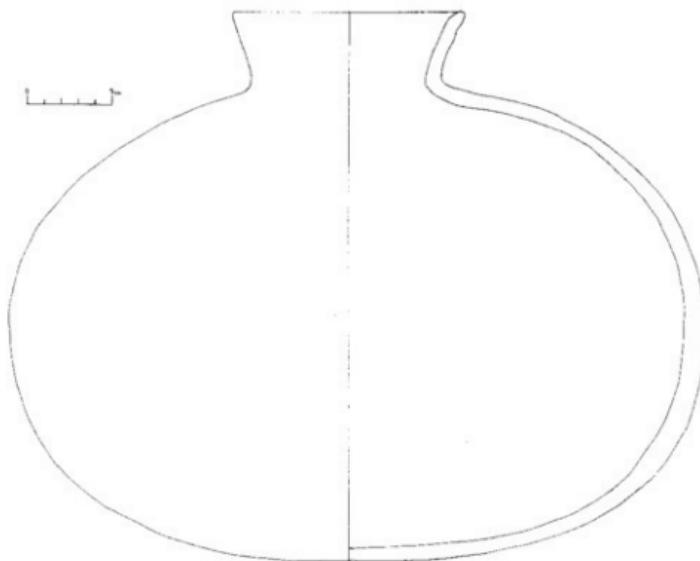
【第8図】 壺(1)



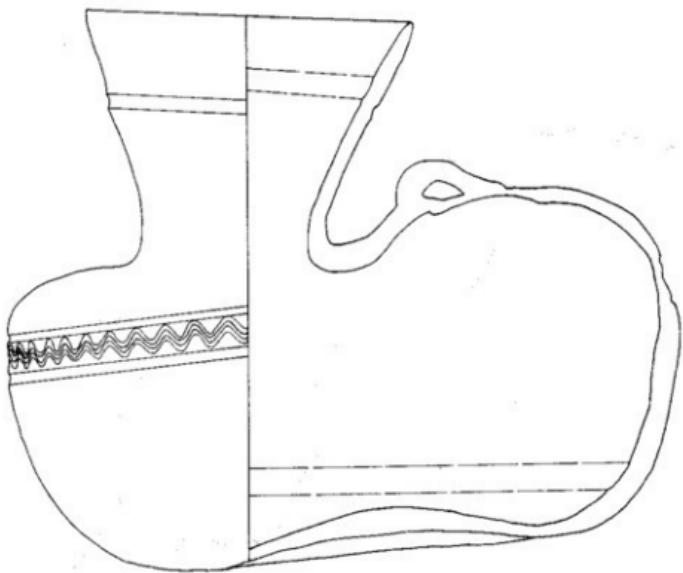
【第9図】 壺 <2>



【第10図】 横 瓢 (よこべ)

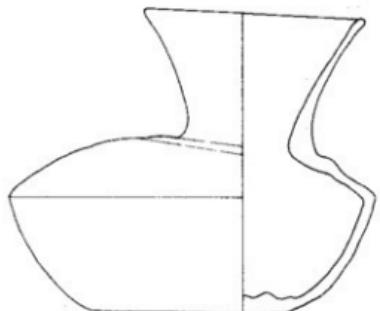


【第11図】 平 瓶 <1>

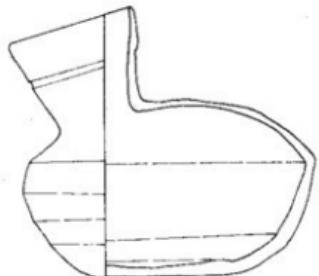


0 5cm

【第12図】 平 瓶 <2>

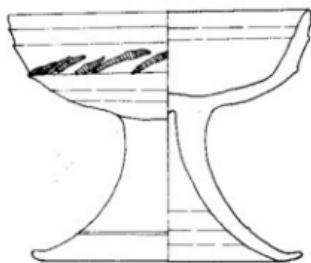


【第13図】 平 瓶 <3>

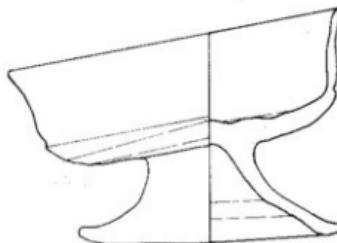


【第14図】 高 环

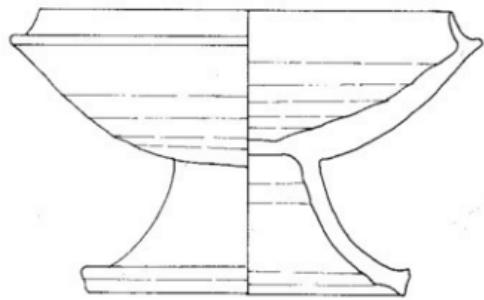
〈1〉



〈2〉

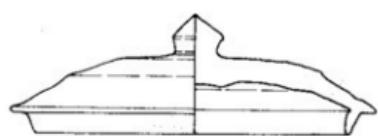


〈3〉

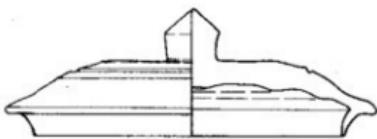


【第15図】 壱 蓋

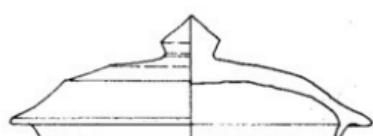
〈1〉



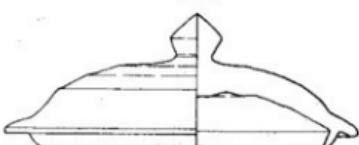
〈2〉



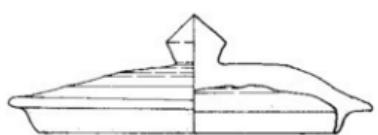
〈3〉



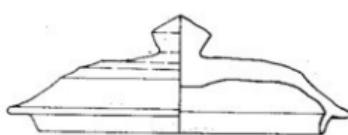
〈4〉



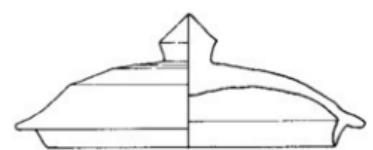
〈5〉



〈6〉

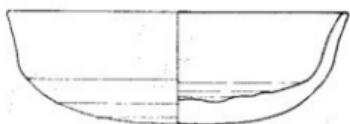


〈7〉

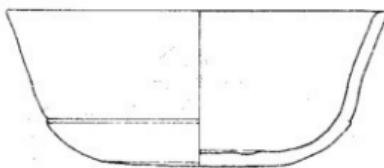


【第16図】 坏身

〈1〉



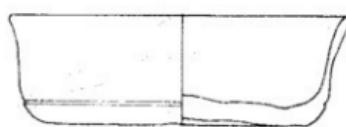
〈2〉



〈3〉



〈4〉



〈5〉



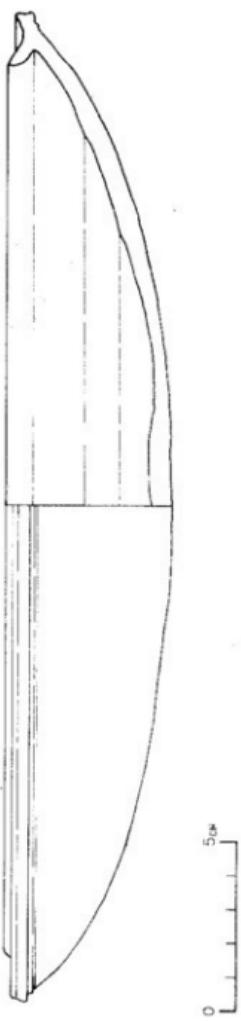
〈6〉



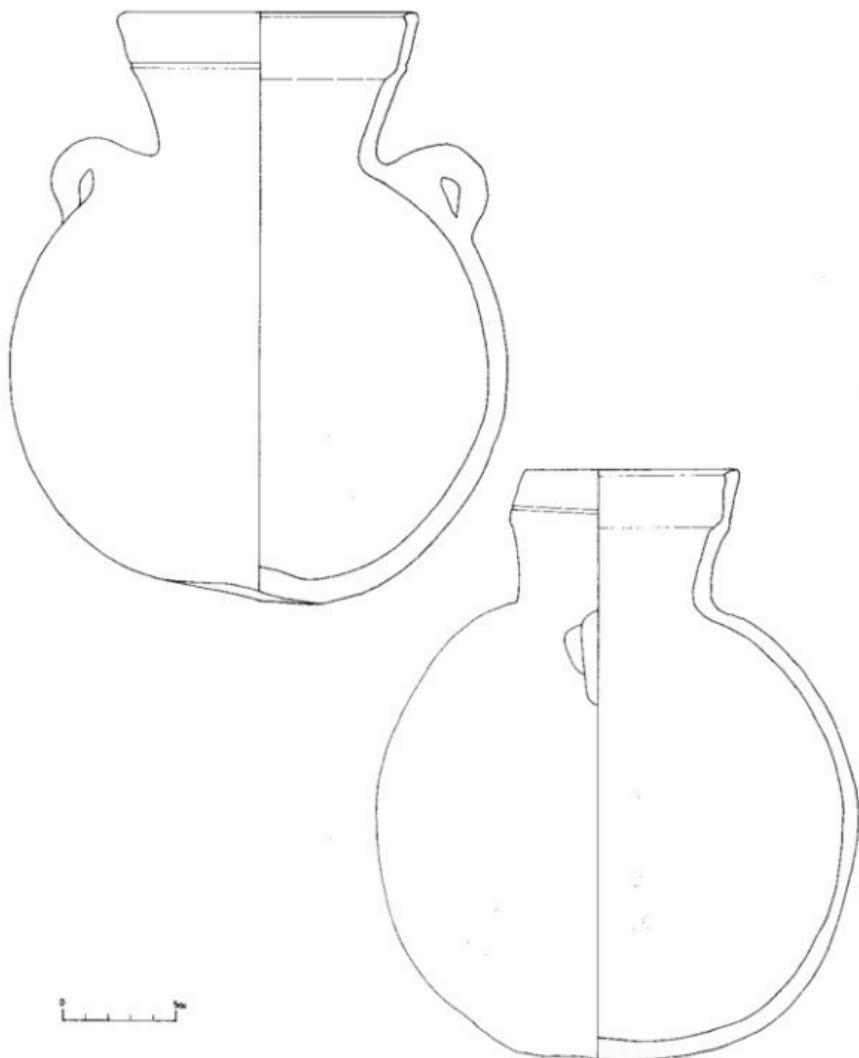
〈7〉



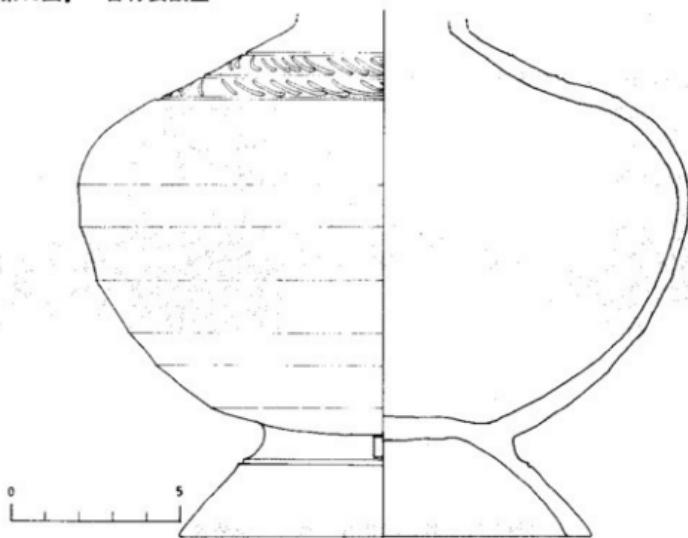
【第17図】 鮎



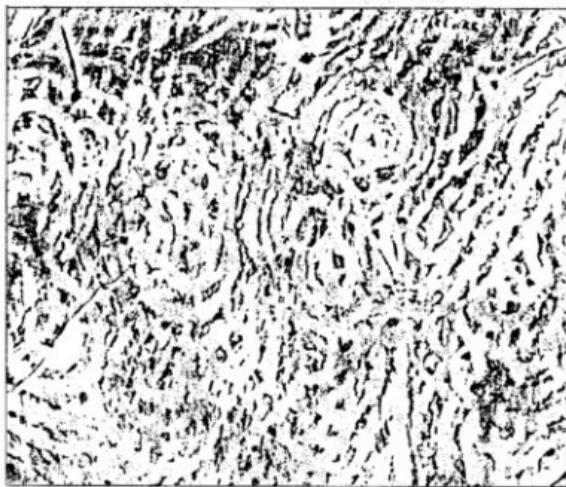
【第18図】 提 瓶



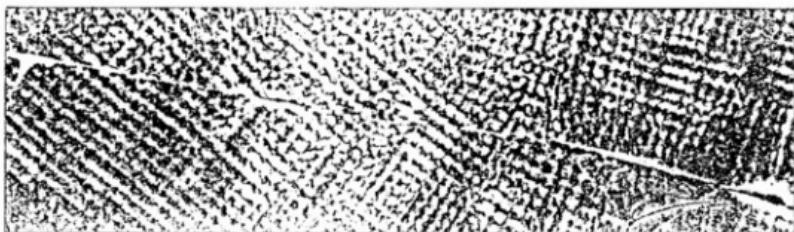
【第19図】 台付長頸壺



【第20図 1】 同心円渦巻文



【第20図2】 大形壺外面・格子文

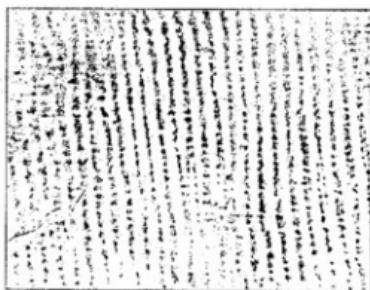


【第21図】 壺<2>内面・同心円渦巻文





【第22図】 格子形押型文



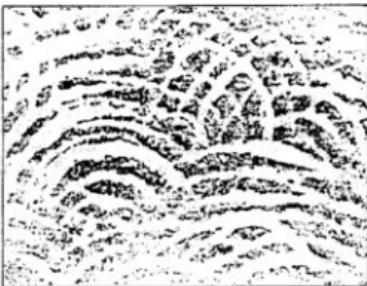
【第23図】 平瓶・波状文



【第24図】 提瓶・胴部の側面中央部のロクロ使用による文様



【第25図】 青海波文



第3章 結び

香川県三豊郡大野原町大字花畠字東野田1277の地の4と1277番地の5にかかる埴穴塚古墳は造営されて以来風雪に耐えていたが、昭和期に入って新田開発の波を受けて以来次第に当初の様相を喪失し、今般の発掘調査前には、何度かの擾乱作業によって殆んど原形を止めない荒廃の甚だしい遺跡として語り継がれていた。調査の結果、平地に造営される事が多くなつた古墳時代後期の造営である方墳（全容が四角形）で大化の薄葬令に準拠した古墳の形式を保持し、又須恵器も確かに大型化しており、台付壇、半瓶の腹部から胸部にうつる部分は張りのある作陶法によって表現されており、壇の蓋のつまみの上部が宝珠化しているなど？乃至8世紀の様相が各所で見受けられる。

当玄室を開む岩石の形状岩質などはお粗末で適切な素材であるとは言ひがたい。勿論河川が遠くしかも下流域である故に、格好の岩石の入手運搬に大変な努力と工夫が必要であるが、素材の乏しい地域の人々が渾身の努力と團結によって、先覚者に報讐の念を捧げつつ永遠の安息所として造営された古墳であろう。